太棹

第百十九號

東京 太棹社 發行

シルウアハウス

蒲田區御園町二ノ一四

電話蒲田三六二一番

幸松

すき焼

和洋御料理

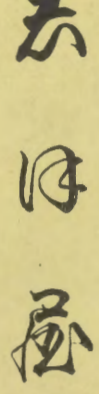
淺草公園（千束二ノ三四）

牛鍋本店

電話根岸(87)〔〇三八〇番 二〇〇〇番

風流・金ぷら・茶漬

【美地句】



新橋二ノ八

電銀二〇八

義太夫古曲發表會同人

義太夫古曲發表會は十月十一日夜並木倶樂部でその第六回を開催し、今月の御會式に因みて日蓮記波木井の里より、勘作住家、經木流し、池上本門寺迄、大切に日親記道行藤波姫物狂ひを上演して頗る好評を博したが、會場には日蓮上人の掛軸を祭りて僧呂の讀經あり、一夜法燈を掲げて香烟を減せず、極めて淸幽な催ほしであつた。當夜の賽錢は翌る日同會より池上本門寺へ納められた。

なほ同會は今回日蓮記を上演するにつき、九月廿九日同人一同揃つて池上へ參詣、歸途此曲を傳へた故人豊澤松太郎の菩提寺九品佛に墓參をした。

寫眞は本門寺にて（前列右より美之助扇之助、義三郎、芳太郎。後列右より松市郎、駒登太夫、紋四郎、卯太夫、猿喜知、巴太夫、朝見太夫）

初代より四代目迄

桐竹門造之碑

大阪文樂座桐竹門造氏は本年師匠の三十三年に相當するので、初代より四代迄累代の石碑を建立し、來る十月廿七日石碑供養を營む事になつた。なほ十一月の文樂座は追善興行として太夫、三味線、人形總動員にて華々しく開演することに決定した。（寫眞は初代、二代、三代、四代桐竹門造之碑）

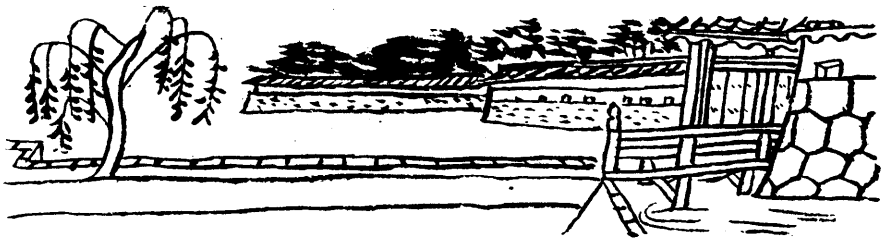
桐竹門造の系圖

初代―桐竹門三郎の門弟、明和の頃より修業、寛政年間に立者となり、文化の初め老年ながら大關となる。其後不詳。

二代目――初名吉田金吾、初代吉田新吾の門弟にて豊松重三郎の長男なり。寛政七年の頃より修業、同十一年七月十二日より道頓堀若太夫芝居にて太功記新物の時天晴役を遣ひ、若年にして名人となる。尤も若き時には女形遣ひなり、追々出世して文化の頃より一筆の立者となり、天保元年八月御靈文樂にて太功記此時門造二代目を繼ぐ。嘉永四年二月歿す。

三代目――初名吉田金吾、初代金四の門弟にて文吾の長男なり。尤も右造事後國八の門第なり。天保十年三月竹田の芝居にて忠臣藏此時長門太夫名付親にて吉田金花といふ。後門造の養子分となり三代目を襲名す。明治四年十二月歿す。

四代目――養子分となつて襲名す。忠臣藏の折明治四十二年十一月十日歿す。



太棹　第百十九號目次

演舞場の素淨瑠璃……齋藤拳三…(二)
『浪花女』を見る……松本翠影…(三)
文樂樂屋圖繪……宮尾しげを…(四)
ラヂオ淨曲漫評……金王丸…(一六)
松貫四「百五十年忌」……(一八)
佐渡二莊即事……芳河士…(一九)
素義人描……內田富太郎…(二〇)
太棹社彙報……(二一)
淨界消息……(二九)
佐渡俳句會……
當座帖・其他……
編輯後記……芳河士…

寫眞＝義太夫古曲發表會同人・桐竹門造之碑

表紙・カット……宮尾しげを……

演舞場の素淨瑠璃

（二日目評）

齋藤拳三

私の記憶にもしあやまりが無いとすれば、今度の演舞場の文樂座素淨瑠璃は實に昭和七年十月廿四日より五日間、土佐太夫、古靱太夫を中心に東劇に興業されて以來實に八年振りのものである。

其間上京した人形入りの若手一座や、或はチョボ――セリフを云はないでも役者との共演は、あくまで主役の猿之助が中心の所作事である以上私はチョボと呼びたい、鶴澤道八がいかに偉大な三味線でも、文樂座の出演の回數よりも歌舞伎劇場への出演の數が多い以上、やつぱり私の大好きな道八は晩年悲しくもチョボになり下つて、長い三絃生活を終るのであらう。――其のチョボとして上京したついでに興業された素淨瑠璃は今しばらく例外として置く。

私の知つてる範圍では人形芝居は大正七年七月十四日より十五日間、まだ先代清六の在世當時古靱太夫が人形入りで有樂座に來たのが最初である。

當時人形芝居になじみの少い東京人は、人形があると義太夫節を觀賞する上に邪魔であると、公々然、幕合に話しあつてるのを耳にしたものである、當時松竹では文樂一座を年一二回は東京で興行する基礎を作らうとした時代で、其の非難を覺悟の上で人形を上京させたのである。

廿三年前を回想すれば全く今昔の感にたへない。卽ち人形遣ひの生命が今にも終るかの如く杞憂されながら、意外にも勢力を增大して來たのに反して、三絃は先づ別としても其の太夫のいかに凋落して來たかは一目して氷解する事と思ふ。

現在の文樂三業中最も至急に何とかしなければいけないのは太夫ではなからうか。今から十年程前に起つた文樂愛護會と云ふ運動も、餘りに人形遣の擁護にのみ心をいたしたのではあるまいか。

當時私は三業中人形遣のみを弱體な部門と決定する事の危險と云ふ意味の小文を書いた事もあつた、が誰も相手にしてくれる人もなかつたのを今寂しく思ひ出すのである。

松竹のやうな興業の天才が現れて、藝人と最負客との愛撫關係を利用して切符賣りの猛運動をするとすれば、其れは人形入りに限る、品物の惡くなつて行くのを平氣ならば相當の命脈を保つ事も出來ると思ふ。

私は何時も文樂が來ると東京の寄席の事を寂しく思ひ出すのである。

東京の寄席の經營は、藝人とか藝事の好きな橋番とか、鳶頭とかが當つてゐたので、何のなす所もなく全く野たれ死をしてしまつたのである、今の松竹や吉本の興業を學べば、小規模な小さい世滯のものだけに何とかなつたものだらうと思ふのである。

現今文樂の三業では何といつても太夫三絃の方が人形よりぐつと勉强してゐる、亦腐つても鯛で人形より義太夫の方がぐつと勝つている。時々人形のバタ〳〵やる無用の足拍子や場當りが成功して、心なき見物が大うけをする不快な時などはかへつて人形拔きの方がしみ〴〵味へるのではないかとさへ思はれて來た、昨年私は演藝畫報へ文樂は年に二回來るならば一度は素淨瑠璃がいゝと書いた程であつた。

其んな譯で、私は此の度の演舞場の大入りを祈りながら非常に期待して出かけたのであつた、然し其れはあくまで好きな義太夫を聽きにいつたばかりで、其の藝評を書こうなど決して考へなかつたのである。

すると佐渡へ旅行中の富取氏から演舞場の事を書けと云つてくる、私の若い親友の某氏は、無論書く方がいゝとせつかけるのである。

其處で話は一寸脇道へそれるが、私は素淨瑠璃の評と云ふものをまだ書いた事がない、其れには一つの自分としてまだ解決し兼る問題があつた。

其れはどうも私の拙文を素義の方々に讀んでもらひたくない一事である、どうも義太夫を語る人は義太夫評を自分の語る參考としたがり過ると思ふ、甚だしい人になると自分の語り物以外は聽かないと云ふ人さへあるやうである。

私の知人某氏の如きは此度の出し物は馬鹿に面白いものばかりだと云ふ、で番組を見ると自分の語るものばかりが並んでゐるのである、此の人など將に餘りにも現金に過る一例で義太夫節は稽古をした人以外には解らないものとしたら、其れは餘りにも狹く小さい世界に淨瑠璃を追ひ込んでしまふのではなからうか。

東京の某三味線（名前は氣の毒故書かない）の如き、自分の演り方以外の演り方は全部非定してしまう亂棒なのさへある。

昔落語の金馬に丁寧に惡い箇所を指適してやつたら「其んなにぐず〳〵云ふなら高座へ上つてやつて見ろ」と云はれた事があつたが、此れでは一言もない。

此んな男が料理人になると、客がまずいと云ふ場合はいち〳〵鍋と材料を持つて客間へ押して行かなければ解決が附か

ないだらう。で淨瑠璃批評第一の目的は、萬一其の聽き方味はひ方を敎へる事が出來れば其れは最高の喜びで、一方、讀者から逆に聽き方、味はひ方に誤りがあれば、指適して戴く事が出來ればそれは望外の收獲であらう。

義太夫を愛する人達が紙上を通じて、いゝ藝を聽いた時は共に喜び、惡い藝を聽いた時は共に悲しむ、其れだけでも批評は有る方がいいと思ふ、增して藝人の苦心の表現を未知の讀者に知らす事が出來たり、藝人の解釋の誤謬を指適する事が萬一出來たりなどしたら批評も一人前であらうと思ふ。

前號の太棹紙上に、竹本都太夫がどんな義太夫を聽いても、いゝ箇所を發見して賞めてゐるとあつたが、これは自分の表現して居ない表現法に接した節、此れを參考とする喜びを語つたものであらう、誠に獨善と天狗の多い藝界にあつて藝人として實に奧ゆかしい態度である。

然し此れを批評家としての態度としては一寸別である、卽ち批評家としては善きものに對しては神の如く尊敬する從順さと同時に、惡しきものに對しては此れを弊履を捨つる如く唾棄する潔癖さを必要とすると思ふ、其點床しき藝人必ずしも決して善き批評家ではない。

日本の批評界で淨瑠璃（義太夫以外を含む）の批評位まづしく少いものはない、此れは其れ自身が至難な、勞多くして功少き下漬みの仕事である事も一因だが、も一つの原因は讀者がその批評を各自師匠の所へ持參する、すると師匠が自己擁護の爲に是を一言のもとに否定してしまう、其れに恐れをなしてしまつたのも一因ではあるまいか。

先月物故された森下辰之助氏が、永年苦心勉强した高座を斷念してまで一意よき批評を書こうとした氣持ちは、義太夫を深く愛した氏として私にはよく其の氣持ちが解る樣な氣がする、私は氏とはつゐに一面識もなかつたが、氏のおかげでレコードを通じて、三代目淸六などの藝の一小部分を知り得た事を常に感謝して居たものである。

で此れから後は、自分の樂しみに語る參考にのみ義太夫を聽く方には、甚だ勝手だが讀んで戴かない事をお願すると同時に、久々でしみじみ素淨瑠璃を樂しみに聽きにいつたお方には御迷惑でも一人でも此の惡文を讀んで頂きたいと思ふ。

も一つ義太夫の話が出ると、きまつて、貴方は何處で何年お習ひになりましたと聞かれるのが御定法で有る、これは丁度會社へ就職願を出した時に學歷を聞かれるのと同じであらうが、私は誰の弟子になつた事もなし、お稽古もした事のないものなので、卽ち義太夫の學歷は小學校へも上らなかつたもので、學歷のないものは採用しない會社は、あきらめるより仕方がないと思つてゐる。

戀女房染分手綱　重の井子別れ

（竹本南部太夫・鶴澤重造）

南部太夫はいゝ聲の太夫だつたが、昔は絃にベタ〳〵附き過て私は好かなかつた、處が新義座へ一人置いて行かれた頃

からメキ〳〵腕を上げた様に私には考いられる、今夜の重の井などを聽くと、一番高い聲こそサビてニゴつたがぐつとよくなつた、がもう一つ絃から離れて望しいと思ふ。

一體私は此の一段を餘り好まない、筋が餘りにも單純過る、三吉を非常に下品にでも語つて、お乳の人として親子の名乘りが仕悪い様にでも語らないと、聽手の胸に迫るものがなく、三吉の母親を恨む言葉も生きて來ないと思ふ、あまり近代じみない様に、餘りにも大きい境遇のへだたりが、肉親の親子の間にも寂しい溝を作る様でありたい。

はたせる哉、某君に聞くと松太郎の演出法は「坂はてる〳〵」の馬子唄をうんと下品にやると云ふ、其れでこそ、吾等の古典藝術は健在なのである、なまじの研究よりも先づ古典にたよる方の安全なのを斯道は一意教へて來たのも其の爲であらう、そうすると有望な此の人あたりにうんと古典を勉強して望しい。重の井の「なぜ尋常に育たぬ」や「ま一度こちらむきや」など結構である。

音聲の明瞭でよく解るのは此の人の武器だが、其の變り「いやこいつほへ居るわ」の「いや」が強く響き過ぎる、尙此の人の美音の女形聲は、三吉の言葉をややともすると女に聞へさせる。

馬子唄は堂々と語らなくてはいけない、然も其の大音が小供に聞へなくてはいけない、其處に義太夫節の至難が有り、今の南部太夫から以上に進む事の至難が有る。

重造の絃にしても藝道荊棘の道は同じである、これを一歩出る事がむづかしい。

吾々聽手側から云ふと、どうも東京の三絃が豊澤會型が多いのと同様、文樂の若手には重造型が多過る。一言にすれば理智的な三絃とでも云ふか、大膽で延び〳〵した缺點もあれば長所も有ると云ふのが望しい。

本藏下屋敷

（竹本相生太夫・野澤吉五郎）

本藏下屋敷は私の大嫌ひな義太夫である、此れは松王下屋敷、赤垣出立なぞと共にあまりにも悪作で、これこそ新體制で廢曲としてしまいたいと思ふ。

悪作に限つて節付けも悪い、（氏太夫の節付けと聞くが私は調べた事がない）私の友人某氏の說の如く「暫く有りて小姓共」の前の踊でも踊りそうな節付けからしてよくない、「樹木泉水居間廣間」や「一越斷ぎん」あたりも、文句に似合はない派手な手が附いてると思ふ。

以前には私は此の淨瑠璃が出るとてんで聽こうとしなかつたものだ、所が私は古靱太夫と先代清六の此の一段を、前記のツバメ印のレコードで聽いたのである、兩人共此の悪作、悪作曲を實に見事に語り、見事に彈いてゐる、特に故清六は派手な藝風が此の作曲に適したものか「竹蘭の枯れてしぼまる」なんて、なんでもない所まで美事に文章を彈いて居る、蘭がパラ〳〵とたをれる様な氣がした、で私は義太夫節の様な

複雑怪奇な古典には、全く迷つてしまつて、此の一段も演り方一つかとも思つた。

然し其後亦誰のを聞いても惡作が耳に附いて面白くない、で私はこれは紫小舟のあの唄が樂しみで、後世命脈をつないで來たものだと思ふ、西風に語らうと東風に彈こうと、吾々素人は惡いものは惡いと云ふより仕方がない。

相生太夫は伴左衞門の言葉にいゝ箇所があつた、がやはり面白くなかつた。北の人に注意したいのはあまりにも進歩の遲い事である、こんな事をして居ると、織太夫や南部太夫に追い拔かれてしまひはすまいか。

連中の多いのでは北の人は斯界の第一人者と聞くが、其れが實力で就いてる連中かどうかを一ツ研究して見る必要も有り、道八がチョボに落ち込んだ理由の十分の一か五分の一かに、或は相生太夫の責任が有りはしないかも反省して見る必要があると思ふ。

此の人の特色はやはり時代物であらう、萬一それなら何か一つ死身でびつくりする程の傑作を一段でも二段でも作る必要がある、つばめ太夫から古靱太夫を繼いだ其時の現古靱はもう三十何歳で引窓や良辨杉で紋下の越路に食い下つて行こうとする氣魄を見せて居る、誰もが賣物としない語り物にでも精心して、局面を打開して望しいと思ふ。

吉五郎が高座に再勤した事は斯道の爲大いに結構だ、私は可成以前から此の人の名前は聞いてゐた、何でも藝人は健康の許す限り決して隱退してはいけない。

年齢の割に古風な、弱腕ながら太夫に好かれさうな具合のいゝ三絃である。

太夫に比すれば多士と云はれる文樂の三絃も、古老或は病み、或は退き、漸く寂寥たる感ある中に、清六と共に誠に聽きばへのある三味線である。其の正直な彈き方はよき音色と相俟つて、心氣よき床しさをも感じさせる。

菅原傳授手習鑑　佐太村

（竹本文字太夫・野澤喜代之助）

駒太夫と共に一番東京になじみのうすい太夫である、私もどんな語り物に特色を出す人なのか知らない、然し何を聽いても大した破綻を見せない人である。

其の佐太村は腹のうすい割によく研究して語つてゐる、一例が白太夫が八重を勵ましながら泣く件にしても「泣くな」と一つ大きく云つて、三度に重ねて泣く言葉がなか〳〵いゝ、然し全段を通じてあまりにも迫力がなさ過る、少し無遠慮な言葉を使へば稽古に語つて居る樣な感じである、其の點精心を望みたい。

喜代之助の絃は此の人の身分として、あれで結構である。

繪本太功記　尼ヶ崎

（豐竹古靱太夫・鶴澤清六）

文樂の至寶と云ふより義太夫界の至寶、古靱太夫の久々の

出演である、今の義太夫節を論ずるものは、先づ古靱太夫を論ずべしとさへ私は思つてゐる程此の人の存在は大きい、然も義太夫節の志士とも思はれる程斯道の前途を案じてゐる勉強家である、義太夫は此の人によつて道が開けるかと思はせるものさへあるに、天は此の志士に二物をあたへず、頭をあたへたかわりに弱き肉體をもあたへた事を私は悲しまざるを得ない。

此の度は痛めやすい調子が整然としてゐるかわりに、輕い中耳炎らしく時々右手を右の耳にあてゝは語つて居た。

然し何としても、此の人の尼ケ崎を聽くと前演者に比して大人と小供の感がある、實にうまい、出來も上々である、特に前半マクラから「行方知れず」までがうまい。

よく義太夫通は此の人を技巧家と云ふ、私は一寸反對である、むしろ外の人の方が技巧が無さ過るのである、只、此の人の肉體的狀態が其の技巧を聽手にめだたせる時と感じさせない時とがあるのみである。

今夜の尼ケ崎を例にとれば、前半は前者の場合後半は後者の場合と云へると思ふ。

尙此の度私が聞いた四日間の語り物を例にとれば、熊谷陣屋が前者で、引窓が後者であらう。

陣屋は引窓以上に此の人の獨特の良い解釋と、うまい箇所が隨所に聽かれた、然し一段を通じて古靱太夫の語る苦しさ以上の苦しさを聽者に感じさせる、引窓には幸に其れが無い、私は引窓以上にうまい陣屋を取らずに引窓の方を頂戴する由因である。

太十にしてもサラリと語り捨てゝゐるよき前半以上に、かへつて後半に此の人一流の良き演出と解釋を見出す事が出來る、箇條書に例記すると

一、「ひつそぎ槍」在來の節は槍をしごく樣な節である、此の人はぐつと槍を突き附ける樣に語る。

二、「突込む手練の槍先に」在來は槍でメチャ突きにした感じだ、此の人は「突込む」で切る爲、一度突いた槍をぐつてぐつと拔いた樣に聞へる。

三、「差足、窺寄り」得意の下の聲で、無氣味な光秀の姿を語る。

四、「取つく島もなかりけり」「島も」の間に一寸泣いて「なかりけり」の間だけで操の絕望を語る。（操のサワリは人形入りの時より一寸節尻りを振つていた）

かく論じて行くと、此の人は古名人を知り義太夫節の古典を固守する側の人よりも、かへつて新らしき古典に生き甲斐を感じやうとする若きインテリ層に眞の知己があるのではなからうか。

萬一私の獨斷に幸にも誤りがなかつたとしたら、古靱太夫こそ長命すればする程、晩年程多幸、且つ重責ある人ではなからうか、せつに其の自愛を祈つて止まない次第である。

淸六の絃は進境著じるしく美事である。

文樂三絃の古老漸く老いんとする時、あの清六の手厚い三味線を聞くのは愉快である、其のマクレても物ともしない彈き方は、特に「さわやかなりし」のいゝ意氣組や「輪廻の綱(キズナ)に繫付られ」の前後などに味を見せた。

「何さ〳〵」の小供の樣なノリの訂正されてるのも愉快だ、只一つ女を彈く時に、も少し色氣が望しいと思ふ。

伊賀越道中双六　沼津

（竹本津太夫・鶴澤寛治郎）

亦相三味線が寛治郎に變つて居る、紋下になつてから此れで本役、代役合せて十一人目の相三味線である、誠に困つたものだ。

この紋下から受ける好感は、七十三歳の高齢まで六十年、一日の如く忠實に正直に語り通して來た好々爺、義太夫の老職人を思はせる一事である、斯道の末期も知らない樣な泰平無事の姿は實に幸福な老人である。

然し其の沼津は昔より衰へた、迫力を缺いて來た。

津太夫の沼津の長所は一本氣に突張つて語る千本松原であつた、お米を主役とする家の場と「深田に下りし白鷺の餌ばみをするに異ならず」と云ふ半二一流の情景を唄ふ小あげは以前から缺點があつた。

東京の大劇場で聽く津太夫は少々不明瞭だが、簡粗故によく通る此の人一流の惡聲がかへつて其の缺點をかくす樣に役立つてる事もあつた。

いつたい私は以前から咲太夫場の小あげを、チャリであるとの論には疑ひを持つものである、三代目咲太夫が大音の笑ひの名人で、若い時濱邊で一人で笑ひの稽古をしてるので、化物が出ると噂された一事を見ても、單なるチャリ語りとは云へない、小あげの平作は小角力の一番も取つたと云ふ好々爺を期待したい。

家の場の「用心には網を張れ」も變りがたりないと思ふ、お米に注意する腹はあるにしても、座興の漫談に云つて望しい、「よう御存じ」の處も面白くなかつた。

寛治郎の三味線は細心の藝風が津太夫の力量第一主義の藝風と不調和で、まるで太夫にぶらさがつて居る感じだつた。

此の人としては、四日目のども又や、五日目の九段目の方がよく彈けてゐたと思ふ。

何にしても相三味線の無い紋下は甚だ困ると思ふ。

以上締切りに追はれ不備の亂文で申譯ない。

大先輩畑中長次氏に聞く

（三日目）

私の常に敬服して居る大先輩畑中長次氏が、めずらしく演舞場の三日目を聽きに行つたと云ふ噂を聽いたので、早速同氏を訪ねて其の感想を聞いた。すると謙遜な同氏は、至難崇高な義太夫節の批評などは、なか〳〵私如きに出來るものでないと云ふのである、で豫ねて此の言葉を豫期して居た私は

其れは解つている、然し現今の斯道は全く衰へて將に崩壞の危期にひんして居る、で貴下と同日にあの文樂一座を聽いた人に、もし一人でも三絃、太夫の苦心の表現を解說してやる事が出來れば其れは斯道の爲、實によき善根をほどこしたもので、地下に眠むる故名人は必ず喜ぶにちがひない、などと私一流に勝手な論法で同氏を說き付けて、やつと承服させて聞き得たのが左記の通りである。

是は別稿小生の二日目評などとは無論天地程異なる、只私の拙筆、惡文がよく其の意味を通じ兼る杞憂があるが、然し文意だけはあくまで私自身の考へを全然加味して居ないつもりである、老齡の同氏故、長時間の雜談に始めは丁寧であつたが、終りが簡略になつた樣な點もあつた事をもう一つ附記させて頂く。

昨年の秋南北座へ私がお誘ひして以來一年振りの對面で、ともすると久々の懷しさから雜談に花が咲くのを本題に引き戻し〳〵話をして貰らつた、私として面白かつたが、其れだけ少々氣骨が折れた形であつた。(文責在齋藤拳三)

戀飛脚大和往來

(竹本南部太夫・鶴澤重造)

新口村

南部さんの新口村は非常に結構でした、私どもの習つたのとは全然異つた行き方の新口村でした、絃の重造さんもよく彈いてましたが、も一つ文章を彈いて頂きたい箇所がありました、部分的に申しますと

(一) 「窓を打つ」が結構でした、語尾をぼんやり語りました、絃もぼんやり彈きました、こう語らないと「あゝ雪が降るそうな」がうまく出て來ません、皆どうも此處をはつきり語りはつきり彈いていけません。

(二) 「すべるを止る高足駄」が結構でした、これは輕るい地合で、よく強く語る人がありますがいけません。

(三) 「お足も」で切つて「洗ひ」と語つて結構でした、此れは續けてはいけません。

(四) 「紲緒(ハナヲ)」と切つて「すけて」と語りました、結構。

(五) 腰膝(ヒザ)を切つて「なぜていたわれば」と語りましたが情がありました。

(六) 「こゝら」で切つて「あたり」にと語りました、孫右衞門の不思議に思ふ心がよく出てゐました。

(七) 一段中一番惡かつたのは「あの文字の肩絹が」の件です、此處はさがして見る氣持ちが出てゐません、雪が降つてる、特に傘をかぶつてる、忠兵衞は親だから一目其れと知りますが、梅川は孫右衞門とは哀れな初對面です、延び上つてさがす意氣を出さなくてはいけません。「此の世のお別れ」が結構だつたのに殘念でした。

(八) 「其の紙」と「此の紙」とが結構でした、こゝは下手に語ると、前から別の紙を用意してる樣に聞へます、南部さんは結構でした、いかにも別の紙を出した樣でした。

(九) 「押しつゝむ涙にそれと」をうれいに語りました、きれ

いな聲の人は美しく語るのに感心です。

（十）「逆様ながら」をよく語りました。

一谷嫩軍記　組打

（竹本相生太夫・野澤吉五郎）

太夫、三絃共に無難で申上る事がありません、只三味線なしで謠がかりに語り出しました、私はやはり謠がかりの相の手がある以上、其れで語り出す様に思つてゐました、が如何なものでしやう。

組打にはこんな思ひ出があります、松屋町の師匠（六代目廣助後の名庭弦阿彌）の所へ使ひに參りました處、丁度、豊澤鶴助師に廣助さんが話してました、先日若い者が「はるかにのび給ふ」の後を三重に彈いてるから、注意してなをしてやらうと思つてわざ〳〵此方から行くと、皆逃げていつてしまう、不勉強な人達だどお小言でした。

ひら假名盛衰記　逆櫓

（竹本文字太夫・野澤喜代之助）

此の一段は松右衞門が梶原の所から吾が家へ歸つてくるまでの端場を三段目に語れ、そして松右衞門家は世話に語れ、三段目の切りに語るのは「權四郎頭が高い」以下で、此れからは堂々と三段目の切りの風格で押して行けと富助師匠は教へてゐました。

文字さんは腹のうすい人なのによく語つて居りました、喜代之助さんもよく彈きました、此の人の歳ではまだ文章を彈けなどは無理です、太夫をあれだけ語らせれば成功です。

（一）「女子だまれどの頬の皮でガヤガヤ頤（オトガイ）たゝく」の權四郎の言葉を泣いて云つてましたが結構です、人によると今まで槌松をなげいたのがケロリとなる人が有ります。

（二）「まんざらの賤しい人でもなさそうな」がいかにもお筆を見て云つてる様で結構です。

（三）「最前歸りがけ樋の口で」を眞世話で云ひ、「若君は身が手に……」から「身が名乘る」までを時代に「必ず樋の口を」からを世話に語りましたが得心しました、よく知つてゐます。

（四）「其うは致すまい」を世話に云ふのもいゝ。

（五）「やれまて女房」を世話でかぶせて「正座になほし」は立派でした。

奥州安達原　袖萩祭文

（豊竹古靱太夫・鶴澤清六）

松屋町の廣助さんのむずかしい演出を實現出來る人は今古靱きりありません、他の人ではむずかし過て演る氣でも云へないのです、安達はどう云ふ系統のお稽古でせうか。何しろ結構な實にむずかしい安達です、只紋下格の人ですから、も少し下へ逃げずに眞正面からぶつかつて戴きたいと思ひます。

清六さんの絃は實に結構です、あんなに物足りない様には

なか〳〵彈けません、此の人はねばらないで足を早くみじかく、よく彈けたものと感心しました、どうも代々淸六と云ふ名はうまい人が繼ぎますな、此の人はチャン〳〵〳〵とあればチャンチャン位は太夫の語つてる語尾に彈いてしまいますからいゝのです。

（一）一體此の一段はマクラから袖萩が出るまでが、つかまへ所のない樣な無理な節が附いて居ります、あの三味線の手ではどこまでを表の聲、どこまでを裏の聲を使つていゝかとんと見當がつきません、其れを古靱さんは實にいゝ足取りで語りました。

（二）「雪あかりにうかがい寄り」が實によく心持ちを出しました。

（三）「歎は理り」以下袖萩に云ふ宗任の言葉は誰でもどなり附ける樣です、古靱さんはさとす樣に云つて結構でした。

（四）「喧し」まで來れば絃は彈いてもいゝが、あの前の餘り彈いてはいけない處をうまく彈きました。

攝州合邦辻　合邦住家

（竹本津太夫・鶴澤寛治郎）

私の隣りにグーグー寢て居る人が有りましたが、津太夫さんの樣に、同じ間同じ足取りでネチ〳〵丁寧にやられてはねむくなります、其の爲三絃も若い人で彈かせてもらふ身分の人でないと、皆逃げ出してしまうのでしやう、それで相三味線が變るのでしやうかしら、何にしても此の人には道八さんの樣な締め附ける三味線の方が良いでしやう、寛治郎さんは無難でした。

（一）合邦は「シンシン」の送りが他のものと異います、マクラと云ふはどうかくのか知りませんが「くらさわ節」と申します。マクラから「尋ね」まで時代「兼つゝ」から、世話になります、津太夫さんのは變らないでつまりません。

（二）現太夫中、此の人位正直に突張つて、眞正面からぶつかつて語る太夫はあまりありません、その點はあの高齡で敬服です。

（三）入平の言葉が下郎言葉でありません。時代過ぎます。

（四）あれだけ力のある人で「逆立つ髪は靑柳の」の嫉妬に凄味がないのはどう云ふ譯でしやうか。

（五）「これ幸とそしらぬ顏」此處は結構でした。

其他の藝談

義太夫は其の人のそれ〴〵の解釋で語るものです、然し「風」のあるものだけはハツキリ守らなければいけません、たとへば酒屋で、あれは綱太夫風と云つて昔の本には表紙に綱太夫と書いてありました、「鐘に散り行く」が其れです、陰氣な樣で陽氣な一種異樣の淨瑠璃です。

總じて義太夫は美聲の人は節を唄ひ過ぎ、惡聲の人は唄ふべき場所を色で語る癖があります。

よく素人のお稽古ばかりすると、間が延び三絃の足が長くなると云ひますが、私は反對です、其れは心がけ只一つだと

思ひます。

只素人の稽古ばかりして居ると、此處一番と云ふ箇所になつて、も一つ彈けなくなる樣になります、義太夫の批評はなか〳〵至難なものですから注意してお書き下さい、昔、故越路さんが、太十の「此處に刈り取る眞柴垣」をじつと下へしづめて語りました、此れは「浮吟」と申しましてアゴを突き出して語ります。

其れを石割松太郎さんが越路も衰へた、前には大きく語つた「此處に刈り取る」を後を大きく語る爲に聲をセーブして起くと評を書きました、此れは大きな誤りで、越路さんが前より太十がよく解つて來たので、其う語つたのです。岡鬼太郎さんが古靱さんの「谷三」を攻擊して、反對にやりこめられた事がありました、あれも弦阿彌さんのお稽古で結構な陣屋です。

二十四孝の三段目で、故仁左衞門の芝居に慈悲藏は河から鯉を釣つて來る可きを「鱒」を釣つて來ると藝評をした劇評家が、かへつて仁左衞門から「ます〳〵御達者」とあつて「ます」の方が本當だと反駁された事がありました。

三絃もお客樣の方から見ると亦別なもので、先年東京で死んだ重太郎の師匠の先々代重造が、ハリ切りの不得意の人で、忠六に十箇所あるハリ切りをハヅしてしまつたので、某太夫は重造さんも彈けなくなつたと某と取り替へた事がありました、然し替つて見ると重造の方がぐつと語りよく、すぐ根を上げてしまつた事が有ります。卽ち重造さんのは撥が糸に眞にあたらなくても、呼吸が其處に彈けてるからです。義太夫の事を何でも知つてゐたといふ人は先づ富助師でしやう、此れには相當に理由が有つて、富助師のお婆さんが先々代組太夫の女房で、子供の時から此の方に色々の藝談を聽かされたから、後年あんな物知りになつたのだそうです。

それから只今の四代目大隅さんが調子をはづすなどと評にありましたが、あれは決してはづすのではなく、音使いが惡いので聽者に其う聞へるのだと思ひます。

× × ×

× × ×

『帝都素義名鑑』の略歷があつてお寫眞の借用出來ぬ方々が未だ八十餘氏もあります、どうぞ御撮影をお急ぎ下され、出來ましたら御手數乍ら御一報を願ひます。早速拜借に參上致します。

太棹社

「浪花女」を見る

松本翠影

「浪花女」は松竹が「殘菊物語」と共に近來稀に見る傑作と稱して、今週封切した人形淨瑠璃を取入れて、「壺坂」の作曲にまつはる明治中期の大阪女性のすがたを取扱つた映畫である。

映畫の批評など門外漢の僕等に出來る仕事ではないが、この映畫を通じて淨瑠璃の修業といふものが如何に眞劍なものであるか、太夫と三絃と掛合ふイキは武士の眞劍勝負にも劣らぬ凄絶なものであるといふ事が痛感せられた。

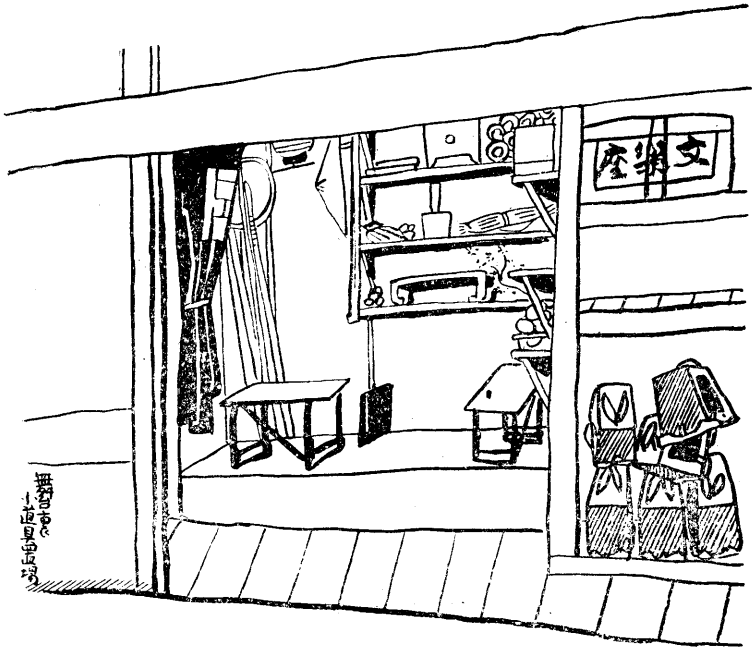
此映畫の主役である田中絹代のお千賀といふのは、團平の藝に對する心持に動かされ自ら進んで後妻に來て、やがては今日行はれてゐる「壺坂靈驗記」の臺本を書いた才女の筈だが、越路太夫の女房との意氣張りから、充分團平の藝道を理解してゐる癖に、越路と別れるやうなことをしたり、御難の旅先で越路から金を惠まれると又二人を一緒にしやうと計つたり、其他おくにや大隅に對する態度など、性格的に一貫したところが缺けてゐるやうに思ふ、これは脚本が書き足りない爲と思はれる。

坂東好太郎の豊澤團平も、もう一息ハツキリ性格が描き出されたらと思ふ、大隅太夫になる川浪良太郎の熱心な稽古ぶりは涙ぐましいものがある、一々言つたら際限がないからやめるが、肝腎の文樂座から特別出演の文字太夫、南部太夫、織太夫、道八、廣助、それに人形の紋十郎、文五郎、榮三等のお歴々がプロにでも說明がない限り、何處でその至藝を發揮して居るか分らない、あの畫面に現れたゞけではホンのつまに使はれたといふやうな感じであつた、もつとこれらの人達の藝術が、此物語の中心に喰ひ入つて活躍する場面は出來ないものであつたらうか。

何んとか批判はするが、兎に角近來での大作であることに間違えはない。二時間半の長丁場を引きつけて倦ましめない點は、流石に巨匠溝口監督の手腕であると讃へたい、淨瑠璃愛好家は是非一見すべき映畫であらう。

最後に、タイトルに表れる「太夫」といふ字が悉く「大夫」となつてゐた、平生太夫といふ字に慣れてゐるから妙に感じて、戻つてから字引を引いたら、これは官名から出たもので、本當は「大夫」の方が正しいらしい、何時から藝人が太夫の名をつけるやうになり、どうして「大夫」が「太夫」と轉用されたか、考證家の說明を聞きたいものである。

文樂

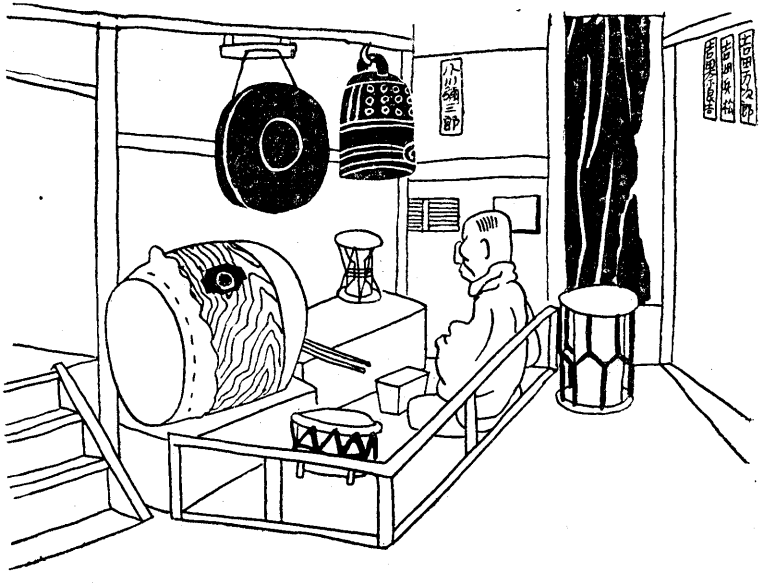


小道具部屋

地方の興行では、その演ずる小屋の小道具部屋を使ひますが、本家の文樂では、部屋といふ名だけで、むしろ置場と云ひたいところです、舞台の左手揚幕を開け閉めする一隅にその時つかふ小道具が釣り棚や、一段高いところへ置いてあります。今小道具の主任は吉田万次郎氏で人形を遣つたり、小道具の世話をやいたり多忙です。觀客席から見えない所に、こうした景色があります。

屋圖繪

宮尾しげを



お囃し部屋

大阪文樂座の舞台の下手の揚幕、見物席からは右手舞台の出入口の上に圖の様に、小川彌三郎さんの囃子部屋があります、小川さんの家は代々人形囃子師で初代は天保の年間に居た三五郎、二代は小川駒吉、三代は小川淺丸、四代は彌三で、五代である今の彌三郎さんに續いてゐます。三代は明治十年生れで、明治晩年にこの世を去り、四代目は稲荷の彦六座と、歌舞伎芝居を掛持ちで歩いたんで七十四で歿しました、現彌三郎氏は今年は五十三歳で文樂に無くてはならぬ人の一人です。圖の正面に見える黑いのは舞台と觀客席を區切る幕が、片方へ寄せられたところです、座つてゐる所に窓があり、こゝから舞台を覗いて芝居に合せて囃子を奏します。

東京床語　〔九月三日〕

伽羅先代萩

＝政岡忠義の段

竹本鏡太夫
絃　野澤市作

六代目附の歌舞伎義太夫鏡太夫の「御殿」の奥、榮御前の出からである。本行を去つてどうなつたとか、衰へたとか御盛んだとかは先づ取り置いて、當夜聽いた所の感じを卒直に、一つ書きにして責めを塞く　(一)榮御前は最初のうち、どうも八汐とついて困つたが、これは榮御前を今一つ高い調子でゆくとよろしいとおもつた。總體に詞の調子が低いのはいけないだらう。(二)政岡は、殘念ながら品位が足りなかつた。それは、詞のテンポを今ちよツと寛々的にするとよいので早口過ぎた結果でないかとおもふ。(三)八汐の笑ひと、政岡のクドキのあひだの泣きが中々良かつた。(四)「礎ぞや」の苦心は受取れたが、ムラといふか、タルミといふかゞ出來たやうだつた。クドキを振り廻はさぬのは、本格的の大舞台とやらであらう。(五)總體に、地合で、聲の出しどころに迷ひ、何やら探り〳〵語つてゐるやうに聽えた。豊富な、あり餘る聲量を控え目に出さうとする爲めでは無いか。(六)息繼ぎに無理な所が多く、かなり骨も折れたやうだが、聽きづらひ所も少くなかつた。ウンときばる語り物だつたら、アノ堂々たる鏡太夫を發揮したであらうものを。(七)絃の市作は、平凡無事といふ所だらう、前のまゝ焚きが彈けたら、師匠譲りの繊細な味のあるところを聽かせ得たであらうとおもつた。

元文樂庵　〔九月十二日〕

さくら時雨

＝櫻町佗住居の段

竹本土佐太夫
絃　野澤吉兵衛
琴　野澤市松

明治時代とはいへ、新作淨瑠璃である高安月郊氏の傑作で、曲は三代目になつた豊澤團平の仙左衛門時代、初演は土佐さんの伊達時代で、爾後土佐さんの專賣物になつてゐる。歌舞伎の方では、先代の仁左衛門好みで、數回上演され、東京の初演には、紹由と三郎兵衛を二役替つて見せたと覺える。次には、三郎兵衛が羽左衛門で、吉野太夫のおとくは、二度とも、最近死歿した歌右衛門が、その氣品ある舞台を見せて何れも好評だつた。土佐太夫は放送もこれで二度目で新曲も、この位に好評を博すれば結構である。前日の豫告から樂しみにして當夜スキツチを入れると、例の土佐式の下の調子の震え聲が始まつて、おや〳〵と一緒に聽くものと顔を見合せたが、直ぐに立直つて好い工合に、語り込んでゆくと、聽き惚れ聽き入る事になる。やつぱり、他人に眞ねられぬ巧ま味が湧いて來る。あの番頭のイキなぞといふものは、並大

抵の修業では出來るものではないとおもふ。おとくの詞のなまりは少し耳障りではあるが、これも奥にゆくほど自然と氣品が出て來て、吉野太夫になつて來る。自由自在に動きはするが、文五郎の人形には、この眞實な心持は出せない。殊にいつぞや東劇だつたか、文樂の引越興行で、文五郎が、おとくで一度奥へ引込んで、次の出場を遲らし、舞台に穴をあけた事を想ひ出した。土佐さんは、それから、時々六つかしい聲を出して、外れかかる『秋の夜永の寢覺め……』など危ないものでハラツとさせた。いよ〳〵紹由の出になつて、雨宿りに引入れられて上り込むあたり、吉兵衞の絃が大に冴えて義太夫には珍らしい調子を彈き、市松の琴とピツタリ合つてしばらくは氣持ちの好い聽き物であつた。太夫、三味線、琴が、この位合つた事は、近來聽かぬ處のもので、餘程の練習があつた事とおもはれる。あの土佐さんは、昨年のヒツト放送「壺坂」の時なども、十數回彈合せをしたとやら聽いたが、後進の有象無象共の學ばうともしないだらうほどの、良い心掛けと感心する。榮三の紹由が斷然傑出する如く、土佐さんも、紹由がやはり最も好かつた。本阿彌光悅もその人らしく、同じ老け役を、はツきり紹由と語り分けたのもさすがである。正味五十分、イヤ面白い事であつた。特に言ひ添えたいのは、當夜の吉兵衞の撥音が非常によく鳴つてゐた事で、吉兵衞の三味線が鳴り出すといふ事は、實に鬼に金棒の感がある。

文樂中堅　〔九月十七日〕

增補生寫朝顏話

―宿屋より大井川迄

竹本南部太夫
鶴澤重造　絃

新義座といふものから、歸り新參といへば言はれるが、文樂生え抜きの艶語り南部太夫が「朝顏」を放送すると聽いて五月に「柳」六月に「阿古屋」を語つた人、露の干ぬ間から繼し〳〵のなげきを充分に、と思つた處、當夜は宿屋の段切れの『深雪は何か氣にかゝり……』と二度目の出から、直ぐ大井川といふ寸法であつた。德右衞門の『金地に一輪朝顏……』と裏の『宮城阿曾次郎事駒澤次郎左衞門』の讀み方は先づ可しとして、『ハツとばかりに俄の仰天』も結構だつたが『突き退け刎ね退け、杖を力に降る雨……』の德右衞門との採み合ひから一生懸命に驅けゆく光景は、今一ト息の工夫と努力を望みたかつた。大井川へ來て『言ふ聲さへも息切れの』は可く、船頭の『俄かの大雨で川が止まつた……』の調子も充分に向うへ出て巧いものであつた。『又た起き直り見えぬ眼に、空を睨んで……』以下は大井川での肝心の語り場とおもふがどうも少々睨み方が足らず『何事ぞいのう』も充分とゆかなかつた。次の『おもへば此の身は先きの世で』からのガツカリした聲音は先づ〳〵で、例の『ひれふる山』になり、大分咽を痛めて居たらしく、思ふところへ屆かなかつたのは惜しかつた。關助と德右衞門が出てからはサラ〳〵と心得た語り方で、本文の女房を出さぬのも無論、德右衞門の腹切りは本文の書き方、節曲の附け方も甚だつまらなく出來てゐるので、どん〳〵片附ける段切りは又た止むを得ぬ事であらう。でも、此處まで語れば一篇の趣向に結末がついてゐるから聽く人には筋が判つて可いといふ譯である。重造氏の絃は堅實で、言ふ處もなかつたやう、誰れか知らぬが、胡弓も邪魔にならずに可し〳〵である。

淨瑠璃作者
松貫四『百五十年忌』
播磨屋が追善興行

江戸に於ける淨瑠璃作者松貫四が中村吉右衛門の祖先であるといふ事が伊原青々園氏に依て發見され、本誌第百十八號(九月號)誌上、同氏の「江戸作者の親玉は」に依り、吉右衛門は始めて祖先が淨瑠璃作者であつた事を知つて感激した話は、九月廿五日の都新聞紙上に掲載されたが、同優が先祖の作とも知らずに偶然にも先代萩の仁木、八汐、男之助、矢口の頓兵衛や由良兵庫を演じてゐた事は奇縁である。

それに就いて明年は松貫四の百四十三年に相當するので、之を繰り上げて吉右衛門は百五十年追善興行を催したいと本月上旬その打合せ會を開いた由である。

なほ伊原青々園氏は波野家の過去帳により貫四の歿年月の判明せし事、又貫四と合作した二冬庵自在は明和好鑑の著作として有名なる人物の事、その二冬庵の罪をかぶりて流刑となりし手代の子が松葉屋瀨川の身受客で、しかも松貫四がその瀨川を主人公としてお駒才三の後日淨瑠璃瀨川鴛を作りし事、又別に松貫四が神樂坂仇討を淨瑠璃に作りし事、その仇討の石碑は蜀山人が書いて多分今でも殘り居る事などいろ〳〵と面白い話を發見せられたので、これ等續稿として次號に御執筆を願ふ事にした。

左に伊原青々園氏並に中村吉右衛門の談を記す。(九月廿五日都新聞掲載)

伊原青々園氏談

「聲曲類纂」を調べてゐると、その註に松貫四が萬屋吉右衛門であるといふ事があり、播磨屋が祖父の萬屋吉右衛門の名を襲いでゐる事を思ひ合せて調査した結果、この江戸作者がその祖先である事を發見しました。

この春成田屋の養子披露に帝國ホテルで同席した折尋ねてみましたが、波野家でも知らないらしかつたので「太棹」に書いたものを送りました。

「昔八丈」は時節柄困りますが、「先代萩」か「矢口渡」の殊に由良兵庫の件ならば播磨屋に欲るし、江戸歌舞伎は隨分松貫四の作に恩惠を蒙つてもゐるので、この江戸作者を記念する興行をしたらばよいと思つてゐます。

中村吉右衛門談

私共の先祖などを伊原先生がお調べ下さつて全く恐縮致してをります、萬屋は震災迄猿若町時代の藏も殘つてをりましたが、三座が代へ地を致します迄芝居茶屋を營んでをりました。

自分が度々演じました役がまさか祖先の作とは存じませんでしたが、これから

はもう一つ氣構へも違つてやれる事と思ひます。

珍しい「矢口」の三の切由良兵庫を大正四年七月歌舞伎座でたつた一度演じてをりますのも、なにかのお導きかと思ひ返されます、俳名の秀山も貫四と改めやうかと思つてをります。

本年が恰度百四十三年に當りますが、百五十年忌にはちと間もありますので、松竹さんとも御相談申し、烏許がましうはございますが、少し繰り上げて松貫四の記念興行もやらして戴かうかと思つてをります。

「太棹」を送つて戴きましたのが恰度彼岸で、殊に父歌六の命日でございましたが、これも先祖のお引合せと有難く存じてをります。

◇　◇

◇　◇

佐渡二荘即事

——芳河士——

偶人荘

三日月の二見へ落ちてほとゝぎす
眠る松契る松あらん星月夜
朝月が大きい山鳩遠くに近くに
いつも出てゐる蛇で葡萄棚曇り
秋涼し屋敷蛇とて蛇二足
醫業廢すあるじと居るや月の秋

古半荘

竹林の果てに沈むや夏の風
手洗の水も澄みたり赤とんぼ
酒癖のつくと飲みをり雨蛙

傑作「引窓」を竹内たもつさんの追善會で聽いて以來、私は元老星野桔梗氏に忘れられない深い印象を受けてゐる。

どこか「藝の虫」を想はせるような達練熟巧な氏の淨瑠璃は、堂に入り格に嵌つていさゝかの危氣もない、あの緩急自在の巧妙さは時に舌を卷かせる程冴えて鮮かだ、急所々々をカツキリと打ち込んで行く卓絶な技倆は、心憎い迄に鍛錬された呼吸の巧さを感じさせる。

しかし、私は時として氏の淨瑠璃に一種の匂を感じることがある、其の匂ひとは……卒直に云へば、今は亡き思ひ出の名優故雁次郎の藝臭である、……と云ふ意味は、何も桔梗氏が雁次郎の模倣をしてゐると云ふ意味ではない、具體的に説明すると私は桔梗氏の語る淨瑠璃の或る人物の詞に、殊に引窓の與兵衛や七段目の由良之助に故雁次郎の面影を聯想させられる。

あの錆びて幅廣い甘味のある聲調の中に、故雁次郎の音調が自然ににじみ出て來るように思はれてならない。

其れと氏の藝質はどこか津太夫を想起させる、幅廣な濁音のやうに瞬感させるが、語り込んで行くと、じつくりと古風な陰影と錆のある甘美な情韻が籠つてゐる。

淨瑠璃の持つ古風さに於て、氏は高瀬操氏と共に玄義の域に達してゐると云つても過言でない、もう一つ氏は誠に掛合の達人である。かぶせて疊み込んで行く意氣の巧さと……じつくりと受けてもたれ合つて行く呼吸の確かさなぞ實に非凡だ。

無名會の掛合で出した「帶屋」の儀平、同風會で演つた「岸姫」の與茂作なぞ、藝格の大きさと同時に古典的な陰影と情趣が、緻密に含まれてゐる充實した傑作であつた。

殊に多少ケレンがかつた突込みなぞ、間髪を入れずに雰圍氣を摑んで、鮮巧に情感を映

素義人描影

星野桔梗氏——達練無比な持味

内田富太郎

描する、硬軟自在の豊かな藝質が人物を達練に描寫して行く。只時として持味の達藝に油が乘り過ぎて、仄か乍らやり過きる微瑾がある。それと錬え上げた巨藝だけに枯れ切つてゐて、おつとりとした品情とふくやかな艶味に少し乏しいことがある。

それが淡い殘念さを覺えさせるが、描線と云ひ呼吸と云ひ洗練熟達な藝格質であるから、其の長所を襟を正して格然と語り込まれると、横綱が本當の力を出した時のやうな素敵な眞價を發揮する。

枯淡な滋味と錆びた情趣に於て桔梗氏は完成された巨星である。

希くば若き素義人の爲めに、その豊富な蘊蓄を傾注して、軌範的な淨瑠璃をより多く語つて戴くことを望み度い。

★ ★ ★ ★

太棹社彙報

▽本欄は大會又は番組御送付のもの、或は新生の會を報道するものであります。
▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。
▽特種の催ほしの外前置きを略します。

——記者——

東都五十義秋季大會

東都五十義會は第卅三回秋季大會を十月廿五日より三日間、吉田三芳、安藤光樂、長谷川文久、高瀨操の四氏審査の下に國民新劇場（築地小劇場改名）に於て華々しく開催する事になり、九月卅日出演申込みを締切つたが、出演申込は例に依り大多數の隆盛を極め、前回出演者は得點順、新加入者は理事に一任といふ事に目下番組作製中である。

淨曲 無名會特別公演

九月廿九日午後四時より日本橋倶樂部に開催、夏季休演後の特別努力會で例に依り滿員盛況の中に、恰も新橋演舞場に於ける文樂座素淨瑠璃の終演直後とて、豊竹古靱太夫を始め、野澤吉兵衛、野澤吉五郎の三師が熱心に傾聽してゐたのが眼立つた。

渡海屋（子太郎、和孝）山名屋（美峰、猿之助）鮨屋（操、道之助）帶屋（どくろ、司好）太十（國聲、猿三郎）

第五回 研究座談會

岡田蝶花形氏主宰の淨瑠璃研究座談會は益々隆盛、第五回は明治時代女義招待會として、九月廿一日正午より四時迄日比谷三信ビル八階東洋軒に於て催ほされた。岡田氏曰く、時代の進行推移は何といふ早さであらう、今回御招きした初代竹本綾之助師や、竹本小土佐師の率ゐた若くて美しい娘義太夫を聽きむさぼつた若い學生、さてはドースル連は今何處にあるか、娘義太夫は過去の映像に過ぎず恐らく時代の大勢から去つて明治時代に見た樣な盛觀は永久に見られまい、せめてそれ等の方々を招待してつきぬ名殘を偲びたい人々の御來會を待つ。と、當日の招待者は初代綾之助、小土佐、朝重、

相玉、三平、新吉、月子、綾香、七五三花、先代團雀、富之助、友吉の十二名であつた。

なほ同氏主催の素玄淨曲研究會の第廿五回は九月廿五日夜第一徴兵講堂にて素義側よりは福島福登久、三芳有樂、岸竹史の三氏、玄人竹本染登出演にて開催した。

坂東勝治身振劇入
聲遊會秋季公演

聲遊會秋季公演は坂東勝治一座身振劇入にて十月十、十一の兩日淺草松屋ホールに於て開催。

（初日）三番叟（勝治社中）辨慶（美光、新花）十種香（美尚、美之助）安達（錦志、染之助）陣屋前（喜城）同奥（喜香）絃（猿喜知）（二日目）三番叟（社中）太十（錦志染之助）堀川（浪六、新花）辨慶（喜城、猿喜知）鮨屋（喜香、猿喜知）

第拾四回
帝都素義聯合會

十月十五、十六の兩日正午より並木倶樂部に開催。

（十五日）本下（越廣、蟻三郎）戻橋（山生、鹿重）忠六（高峰、松造）先代（松峰、鹿重）寺子屋（司若、松四郎）壺坂（いづみ仙玉）酒屋（都竹、都太夫）寺子屋（三彌、猿藏）宿屋（淺路、条造）岡崎（乃菊、佳照）—夜—紙治（紫蝶、仙玉）合邦前（三壽、猿藏）野崎（三玉、龜造）合邦奥（清司、猿藏）引窓（松鶴、猿之助）鮨屋（昇、團市）上かん屋（文盛、条造）伊賀五（旭、道之助）鈴ケ森（松寶）秋津島（靜史、綱助）紙治（千晴、團市）（十六日）玉三（みやこ、蟻三郎）沼津（あるを、条造）安達（喜玉、鶴玉）岸姫（和雷、呂若）岡崎（雅樂、綱助）逆櫓都、条造）野崎（生昇、都太夫）辨慶（山門、猿藏）壺坂（喜聲、素女若）安達（松鶴猿之助）—夜—安達（竹糸、猿之助）組打（義昌、綱助）十種香（枝蝶、佳照）合邦（義昇、素昇）帶屋（かなめ、新兆）繼十（光玉佳照）野崎（三白、猿藏）太十（喜鶴、鶴玉）新口村（蘇鳳、福子）八百屋（叶、岬太夫）鮨屋（桔梗、綱助）

東京
淨瑠璃人形芝居
秋季報國公演

池田三國氏は南北座を主宰して以來、衰亡せる江戸淨瑠璃人形芝居の復活に努力し、春秋二回の公演の外、傷病將士慰問或は三越、松屋等のホールにて開催、修業と練磨に甚大なる犧牲を拂ひ、その技藝は益々上達を見るに至つたが、十月十四日より三日間午後四時より日本橋倶樂部に於て第七回報國公演を開催し、今春の公演に好評を博した「日本振袖初、出雲籤の川大蛇退治の段」を再演する外

紀元二千六百年を記念し義太夫古曲發表會の贊助出演のもとに「天の岩戸」を上演する事になつた。三日間の番組左の通り

（初日）戀飛脚大和往來＝淡路町（駒登太夫、和孝）封印切（浪花太夫、猿平）新口村（巴太夫、猿喜知）辨慶上使（都太夫、条造）日本振袖初（浪花太夫、近衛太夫、巴太夫）（二日目）草履打（浪江太夫、絃内）阿波鳴戸（都太夫、辰六）國性爺合戰＝樓門（近衛太夫、松四郎）獅子ケ城（駒登太夫、扇之助。浪花太夫、猿平）伊達娘戀緋鹿子＝八百屋より櫓迄（巴太夫、猿喜知）（三日目）艶容女舞衣＝美濃屋（巴太夫、猿喜知）酒屋（都太夫、条造）陣屋（浪花太夫、猿平。近衛太夫、松四郎）妹脊山＝姫戻（浪江太夫、絃内）御殿（駒登太夫、和孝）天の岩戸（朝見太夫、卯太夫、巴太夫、駒登太夫。芳太郎扇之助、宗之助、絃内、猿喜知、松四郎美之助、團七、松市郎）

日本義太夫因會 秋季男子部大會

十月八日午後一時より日本橋倶樂部に於て開催した。

沼津（平作、殿母太夫。重兵衛、近衛太夫。安兵衛、稻太夫。紋左工門、延左工門）田植（扇太夫、宗之助）油屋（季美太夫、辰六）太十（都太夫、条造）堀川（紅葉太夫、猿三郎）質店（彌國太夫、團市）岸姫（東太夫、猿三郎）聚樂町（朝見太夫、芳太郎）合邦（駒登太夫、扇之助）新町（浪花太夫、猿平）長局（津彌太夫、扇之助）酒屋（巖太夫、猿藏）中將姫（巴太夫、猿喜知）下總屋（稻太夫、猿藏）忠六（歳太夫、美之助）安達（近衛太夫、松四郎）岡崎（殿母太夫、良造）大切白石（掛合）（宮城野、東太夫。宮里、宮柴、駒登太夫。しのぶ、朝見太夫。宗六、彌國太夫。猿之助）

横濱へ進出の 義太夫古曲發表會

前號既載の通り十月十一日並木倶樂部に於て秋季演奏會を催ほした同會は横濱最負の招きに依り、十月廿四日午後六時より同市四ツ橋長友倶樂部にて左記番組のもとに賑々しく開演する事になつた。なほ同會は本年に入り羽衣天人「駿河舞の曲」傾城倭莊子「二世の緣花の臺」天岩戸神樂、伊勢音頭踊、日蓮記「波木井の里より道行藤浪物狂ひ迄」等の古曲を發表した。

横濱演奏會番組＝伊勢音頭踊（卯太夫、宗之助、美之助、絃内）新口村（朝見太夫芳太郎）陣屋（駒登太夫、扇之助）天の岩戸神樂（朝見太夫、卯太夫、駒登太夫、巴太夫。芳太郎、絃内、美之助、松市郎、宗之助、扇之助、猿喜知）太十（卯太夫、松市郎）八百屋（巴太夫、猿喜知）阿古屋（駒登太夫、扇之助。重忠、朝見太夫、美之助

岩永、巴太夫、紘内。榛澤、卯太夫、松　曲、宗之助）市郎。三味線、芳太郎、ツレ猿喜知、三

第廿回　竹本素女公演會

竹本素女第廿回公演會は十月十三日より十七日迄五日間毎日午後五時より樂地小劇場に於て開催。番組左の通り

（十三日）　日吉（素國）佐太村（重子、勝八）紙茶（越道、巴住）辨慶（素廣、駒登久）沼津（素昇、猿玉）安達（越駒、紋敎）酒屋（東朝、三平）布四（素女）大切（鶴澤道八新曲）子壽美の道行（掛合）（十四日）松王屋敷（素國）鈴ヶ森（素次、駒清）陣屋（素廣、駒登久）新口（越駒、紋敎）先代（染登、猿幸）質店（小津賀、紋敎）玉三（越道、巴住）壺坂（素女）大切忠六（素八、素一）（十五日）　蝶八（素國）宿屋（素廣、駒登久）蹇（東朝、三平）鮨屋（素昇、猿玉）紙屋（駒越、紋敎）近八（重子、勝八）白石（染登、猿幸）寺子屋（素女）大切野崎（素八、素一）（十六日）二度目（素國）山名屋（越道、巴住）長局（染登、猿幸）吉田屋（重子、勝八）十種香（小津賀、紋敎）鳴戸（東朝、三平）太十（素昇、猿玉）合邦（素女）大切先代（素八、素一）（十七日）辨慶（素國）阿漕（東朝、三平）草履打（素昇、猿玉）野崎（小津賀、紋敎）逆櫓（重子勝八）帶屋（越道、巴住）柳（素廣、駒登久）岡崎（素女）大切蝶の道行（掛合）

日本義太夫因女子部秋季大會

十一月一日正午より、左記の通り賑々しき番組のもとに日本橋倶樂部に於て開催。

橋辨慶（牛若丸、佳世子。辨慶、佳仙。ツレ、佳照。三味線、清一。ツレ、清二、若好　聚樂町（越香）本下（梅葉、染之助）柳（團廣、吉時）紙屋（巴駒、巴住）鰻谷（清司、猿玉）引窓（昇登、綱助）寺子屋（佳仙、仙照）鳴門（素八、素一）安達（綾千代、猿玉）鮨屋（猿春、三生）帶屋（越道、巴住）逆櫓（彌周、三生）陣屋（團蝶、猿幸）壺坂澤市内（綾清、駒登久）同御寺（駒龍、津賀昇）蝶八（越駒、紋敎）合邦（素昇、猿玉）朝顏（若好、清一）吉田屋（小津賀、紋敎）太十（佳照、清一）十種香（重子、勝八）酒屋（佳若、清一）先代（染登、猿幸）大切忠臣藏八段目道行（小浪、駒龍。戸無瀨、綾清。ツレ、團蝶、昇登、猿春。三味線、津賀昇。ツレ、駒登久、紋敎、猿玉、清一）

因會女子部後援會

十月廿八日午後四時より並木倶樂部に於て開催。

鳴門（佳世子、佳仙）中將姫（越香）紙屋前（越駒、紋敎）太十（巴駒、巴住）沼津（團蝶、猿幸）先代（昇登、巴住）紙屋奥（清司、

猿玉)柳(彌周、三生)戀十(重子、勝八)野崎(住若、清一)鮨屋(素昇、猿玉)合邦(駒龍、津賀昇)

繪解淨瑠璃の考案

人形、身振劇とある中に、これは又繪解(ゑとき)淨瑠璃が考案されたといふ耳寄りの話。考案者は北海道札幌鶴澤德次郎師で、淨瑠璃を語つてゐる高座の傍らに、語り物を紙芝居に仕組んで極めて簡單に映畫の如く聽衆の前に繰り展げるといふ仕掛け。現在玉三、太十、忠三などが出來て北海道では「見て聞く淨瑠璃」として各新聞紙上で好評を博してゐるさうだが、今度奥村三玉氏がこの權利を讓り受けて差當り三十本程製作するといふ事である。東京には紙芝居の繪畫きのうまいのは二人位しか無いさうで、目下壺坂柳、白石、太十、野崎、合邦の製作中だが、これが發表は來月上旬頃の由で、氏は獨專するものでなく、希望者には大に使用して貰ふ方法を取りたいとの事である。

綾秀會

九月例會を十七日交正倶樂部、十九日駒形倶樂部に開催。

(十七日) 日吉(翠瓢)安達(愛壽)先代(治光)四ツ谷(靜翠)油屋(壽瓢) (十九日) 日吉(翠瓢)安達(仙昇)油屋(梅月)長局(壽瓢)絃(綾秀、君江)

東都素義

國技會

九月十一日午後六時より文化倶樂部に於て左記番組に依り開催。同會常務理事近藤鳳氏は時局に鑑み今後東都義太夫會の大會を斷然中止する事にした。

忠三(上誠、播摩一)忠四(叶、扇之助)赤坦(鳳、紋左工門)本下(柳光、佳照)酒屋(一義、播摩一)湊町(光玉、佳照)沼津(五口、道之助)油屋(うつぼ、絃平)太十(掛合)(光秀、上誠。十次郎、柳光。さつき、叶。操、一義、初菊、光玉。久吉鳳)絃(紋左工門)

三好會

九月廿三日淀橋倶樂部に於て、竹本綾清連と合同秋季大會を開催した同會は十月廿三日駒形倶樂部にて左の番組に依り開催。

十種香(まつ子)柳(巴好)壺坂(喜三香)忠六(時昇)太十(知晟) 先代(園樂)絃(三好)

松葉家音譜普及會

同會にては左記吹込豫約募集中であるが、此内申込みの多き分より順次吹込む事になつてゐる。

吉田屋、妙心寺、殿中より裏門迄、日吉丸(再)勘作内、鈴ヶ森、毛谷村、三日太平記、竹の間、吃又、橋本、蝶花形、沓掛村、蹇、四ツ谷、布四、梅由、沼津湊町、八陣(再)

坂東勝治身振劇入

義太夫大會

十月六日より四日間毎日一時より並木

倶樂部に開催した。

（六日）忠六（春水、歳太夫）日吉（いづみ、仙玉）油屋（叶、扇之助）合邦（竹史東太夫）鳴門（紫蝶、仙玉）岸姫（浪六、新花）（七日）合邦（春水、歳太夫）鮨屋（歸世花、扇之助）布四（叶、岬太夫）寺子屋（歌子、勝助）聚樂町（山生、鹿重）赤垣（まつば、鶴玉）（八日）鮨屋（吳光、素昇）太十（美尙、美之助）辨慶（喜城、猿喜知）安達（錦志、染之助）新口（義昇、素昇）沼津（桔梗、素昇）（九日）戀十（里芳、勝助）太十（錦松、龜造）野崎（登盛、条造）新口（いづみ、仙玉）市若初陣（ひばり、紘平）陣屋（喜香、猿喜知）

女天會 秋季大會

十月十八日正午より並木倶樂部に開催

京濱素義聯盟大會

十月十七日より三日間、大井海岸見番樓上にて開催。

名作淨瑠璃同好會

右はいづれも編輯〆切迄に番組未着の爲め遺憾乍ら次號掲載。その外番組御送付なき爲め、詳細不明にてこれ又報道出來ず。不悪御諒承を乞ふ。

地方の部

大日本素人淨瑠璃會

第十回競演大會を竹本大隅太夫、竹本鍛太夫、竹本文字太夫、鶴澤叶、豊澤團友、伊東柳平、笹村ふんどの七氏審査の下に十月廿四日より廿七日迄四日間正午より大阪文樂座に於て開催。同會は第十回記念として「會誌」を編纂し、現在の會員に無料頒布することにした。

豊竹猿春小演の夕

豊竹猿春後援會主催にて十月十三日午後五時より東橋亭に開催。

日吉（津賀重、津賀昇）壷坂（昇登、巴住）太十（駒龍、津賀昇）油屋（小津賀、紋敎）先代（猿春、三生）

第八回 共精會競演大會

古賀大彌氏を會長とする共精會は伊東柳平、三木金星兩氏の審査にて中津市蓬萊觀劇場に於て十月十一日より十四日迄四日間開催。十日は審査員出演デーとして當日は各審査員其他多數名士の出演を以て同會一段の氣勢を添え、十一日よりの競演には三役賞東西六名（大關旗並に優勝旗）幕内最高昇點者を特別賞として

一名（竹本土佐太夫揮毫の額面）本賞十名一等（優勝旗、竹本津太夫、鶴澤友次郎揮毫二枚折屏風）二等（豊竹古靱太夫、鶴澤清六揮毫二枚折屏風）三等（竹本大隅太夫、豊澤廣助揮毫二枚折屏風）四等五等（竹本文字太夫外寄贈の肩衣）以下十等までそゞ〳〵贈呈するといふ豪華を極めたものである。

大阪文樂座人形淨瑠璃

警察官並に同家族慰安會

大連市樋口萬華氏は去月文樂座若手太夫三味線及び人形の大連劇場で開演を機に九月廿二日一座を招聘して正午より三時迄小崗子不老街福興舞臺に於て、小崗子警防團伏見分團後援のもとに警察官並に同家族慰安會を催ほし頗る盛會を極めた。

合邦（萬華、友衞門）人形（合邦、玉幸。女房、紋太郎、玉手、紋十郎、入平、玉德）鳴戸（文太夫、吉季）人形（おつる、紋司。お弓、光之助）酒屋（呂太夫、吉左）人形（宗岸、政龜。お園、文五郎。半兵衞、玉市。女房、多三郎）

西田可松氏歡迎義太夫會

例年の如く北海道へ商用に赴いた西田可松氏の爲め、小樽市重友會は九月十三日午後六時より花園町會館に於て歡迎義太夫會を開催し、同地近來稀な盛況を呈した。

柳（貴昇、一八）菅四（語樂、一八）忠四（德和、重歌）壺坂（梶晴、重吉）玉三（丸山、重歌）太十（可松、重吉）堀川（越長、重吉、ツレ重歌）

豐澤廣助師歡迎淨瑠璃會

新京素義有志主催にて九月十三日午後六時より同市祝町高野山に於て同師の歡迎淨瑠璃會を開催。

先代（仙糸）陣屋（金星）十種香（千洲）寺子屋（小果）鮨屋（津代子）合邦（葉松）油屋（立昇）沼津（義鳳）太十（路考）四ツ谷（瓢樂）（以上絃廣助）大切。新口村（廣助、仙糸）

なほ十四、十五の兩日午後五時より同京聲會主催にて、西本願寺内藤影幼稚園にて開催。

（十四日）梅忠（丸榮）御所（千雀）壺坂（建部）安達（典子）忠六（有陵）陣屋（柳水）本下（弘子）合邦（一聲）先代（菊水）太十（廣一郎）（十五日）鮨屋（依子）御殿（文武）日吉（豊又助（貴月）太十前（清鳳）同奥（龜樂）菅四（稻雀）合邦（花月）沼津（義鳳）大切、壺坂（廣助、廣一郎）以上絃（廣助）

河野國聲氏歡迎淨瑠璃會

大連旭勝會は河野國聲氏を迎へ九月一四、十五兩日午後六時より常盤町社會館にて歡迎淨瑠璃會を開催した。

（初日）鈴ヶ森（禮子）組打（義昇）陣屋（璃松）中將姫（喜樂）吃又（翠香）太十（國聲）（二日目）朝顏（禮子）忠六（華玉）志度寺（萬華）合邦（白水）四ツ谷（あさひ）辨慶（國聲）紘（旭勝、仙廣、旭晴）

なほ此外河野國聲氏歡迎淨瑠璃會の番組は大阪、奉天、撫順等よりも送られたが、右は八月中とて少々記事遲れにつき省略する事にした。

大阪 文樂座人形淨瑠璃

十月興行は六日初日にて四ツ橋文樂座に於て開演。

良辨杉由來＝志賀の里（伊達太夫、友衞門）ツレ（團伊三）（友十郎、廣一）八雲（龍市、吉藏）櫻の宮物狂ひ（呂太夫）（織太夫、南部太夫）（伊勢太夫）（さの太夫、津磨太夫）（宮太夫、松島太夫）（英太夫、越名太夫）（仙糸）（吉彌）（重造、團六）（鶴太郎、綱延、團作）大東寺（文字太夫、新左衞門）二月堂（古靱太夫、清六）

安宅關＝勸進帳（辨慶、大隅太夫。義經、伊達太夫。伊勢、和泉太夫。駿河、長尾太夫。片岡、雛太夫。常陸坊、富太夫）（道八）（廣助）（友造、友平）（叶太郎、友作）（清友、勝芳、叶）富樫（相生太夫）番卒（千駒太夫、播路太夫）（常子太夫、隅若太夫）（吉五郎、喜代之助、新太郎）

國性爺合戰＝樓門（織太夫、團六、南部太夫、重造）獅子ケ城（津太夫、寛治郎）

壺坂觀音靈驗記＝澤市内より御寺迄（駒太夫、清二郎、ツレ吉季）

人形配役（良辨杉より役割順）

渚の方、和藤内母（文五郎）光丸（紋之助）小枝（榮三郎）藤野（紋司）花賣（文作）吹玉（玉市）雲彌坊（門造）良辨、辨慶、甘輝（榮三）弟子僧（文枝）同（紋昇）義經、錦祥女、お里（紋十郎）伊勢（光之助）駿河（紋太郎）片岡（玉德）常陸坊（小兵吉）富樫、和藤内（玉藏）老一官（政龜）澤市（玉幸）觀世音（文二郎）

お願ひ

謹啓時下秋冷の候皆々様益々御清榮の段奉慶賀候陳者毎々御引立を蒙り難有御禮申上候扨て私儀本年は師匠三十三回忌に相當仕り候間微志聊かながら師匠累代石碑の建立を發願致し漸く此度建立の素志を相遂げ來る十月廿七日石碑供養を營み申度存候なほ文樂座の十一月は松竹の諒解を得て同座總動員にて追善興行として開演の手筈に相成居り候に就ては此上とも何卒御愛顧の程偏に御願申上候

十月　桐竹門造

各位様

淨界消息

▲益田仙糸氏より（新京）拜啓時下秋冷の候貴社益々御清榮賀上候陳者かねて來京の噂ありし松葉家廣助師去る七日突如福岡發旅客機にて來京せられ候につき別紙の通り歡迎淨瑠璃會を開催致候處三日とも非常なる盛會にて同師も頗る滿足して本十六日朝當地發旅客機にて福岡に引返され候

第一日目は小生の肝煎にて二日目、三日は廣一郎主宰する京聲會に候へばその御つもりにて御掲載被下度候掲載の雜誌は左記の通り京聲會の主腦者たる肥後柳水氏と廣一郎師匠に御發送被下度候次に去る十日、十一日は例の文樂若手引越興行にて當地滿鐵社員倶樂部にて開演是亦非常なる人氣に之有候先年津太夫師以下メンバーの時さえ如斯盛況を呈せず是は時局柄と文樂に對する一般の關心が注がれたる强さと存じ候此處新京は義太夫の會で持切と云ふ狀態に候何にしても吾々同好者にとりかゝる現象は愉快此上もなき事に候

以上御報知旁々御依賴迄如斯御座候是より當地淨界御報可申候

▲義太夫振興會 伊藤爲吉氏の努力にて創立された義太夫振興會は、九月上旬東京軍人會館に於て發會式を擧行する筈であつたが、文樂座出演太夫の都合上延期する事になつた。

▲九重會 今春大阪八千代會諸氏の東上に依て、合同親睦大會を並木倶樂部に開催した九重會は今秋東京方の出張の番にて、十一月十二日同會諸氏は大阪へ出張し堀江演舞場にて八千代會と合同大會を開催に決定。

▲大阪素人淨瑠璃協會 大阪素義界に於ては「大阪素人淨瑠璃協會」の名稱のもとに「斯道の健全なる發展を圖ると共に國民精神の發揚と、國民精操の淘治啓發に努め、以て藝術報國の實を擧ぐべく斯界動向の指導機關を結成すべし」と近く素義界一大團結を成さんと各會代表者が集つてその協議が行はれたが、追て成立の曉は同會の詳報を待て報道する。

▲山田壽瓢氏より 語友崎村翠鳳氏追善義太夫會を九月廿八日淀橋區上落合崎村邸にて開催、廣間一杯の盛況を呈せり

日吉（翠瓢）先代（治光）酒屋（綾登）中將姫（龍司）長局（壽瓢）絃（綾秀）

捧佛前

相識偶然交誼堅　共同趣味是前絲
追懷往昔淸遊夕　綺語絶妙和彈絃

▲豐竹湊太夫の碑 昨年の春故人となつた七世豐竹湊太夫の碑を兩國回向院で建立中であつたが此頃竣功したので、十月十一日石碑供養を營み列席者を新橋演舞場の曾我廼家一座へ招待した。

絹地・色紙・短冊

下谷區仲御徒町一ノ一七

波間商店

本誌後援名譽會員

（イロハ順）

（東京之部）

廣瀬いろは氏　木村司一氏　鈴木信一氏　宮原以興子氏　吉川浪補氏　櫻井呂光氏　阿部一氏　橋本梅月氏　菅原葉光氏　菅田梅笑氏　北島北斗氏　佐藤平之助氏　中澤巴氏　安藤どくろ氏　吉田登盛氏　小川都山氏　安藤都竹氏　安藤昇氏　保々長平氏　緒方千晴氏

栗原千鶴氏　久米中次氏　岸竹史一氏　松本千鳥氏　神馬里芳氏　岡本柳光氏　林昇氏　本木大熊氏　鈴木和樂氏　小林和舟氏　林和勢氏　青山和狂氏　鈴木和勇氏　飛石かなめ氏　加藤兜氏　高橋可遊氏　西田可松氏　黒川叶氏　高山和子氏　大用大嘉津氏

小森叶昇氏　田口辰壽氏　疋田大龍氏　井上巽氏　小林太二八氏　根本團壽氏　野田高尾氏　杉山橋氏　坂倉素遊氏　川口子太郎氏　新川月美氏　小埜長とろ氏　宮本武藏氏　萩原うぼ氏　乃村乃菊氏　中野吳羽氏　石川華笑氏　本城冠之氏　山下彌生氏　國井やまと氏　岡田彌聲氏　福中又絲氏　松林福笑氏　長谷川文久氏

上杉文盛氏　鈴木兒雀氏　安藤光樂氏　水戸部壽氏　原田越巴氏　河野國聲氏　松岡語松氏　田中湖月氏　湯淺光玉氏　保谷紅司氏　山崎向陽氏　岡崎円六氏　寶藏寺天昇氏　堂野前鐵幹氏　大築葵氏　及川旭氏　柳川有明氏　中川愛氷氏　藤牧淡路氏　奥村三玉氏　寺岡三幸氏　木村さかえ氏　齋藤山生氏　川田二三樂氏

平井榮氏　橋本三司氏　藤田壽三氏　細川清氏　金田鳳氏　錦田金氏　淺田錦奇氏　錦松氏　星野桔梗氏　日野金泉氏　前島貴昇氏　岡木貴一郎氏　歸山歸世花氏　年井軌外氏　橋本掬月氏　乾梗氏　增田桔喜城氏　增田喜香氏　三浦鏡鳳氏　澤部其角氏　岩木雀氏　吉良蟻義若氏　山田義昇氏　三並義昌氏　保坂有曲氏　岩田末成氏

高瀨操氏　吉田美地句氏　横井三由氏　野口みなと氏　北村三葵氏　池田三國氏　吉田三芳氏　須田美義氏　村上美津豆氏　高橋宮古氏　鈴木松寶氏　小原松樂氏　勝田松雨氏　菊池秋月氏　花房紫蝶氏　平井壽樂氏　山田壽瓢氏　田口司重氏　倉田司樂氏　濱口秋華氏　打矢晉水氏　武笠宏亮氏　高品一重氏

平山平茶氏　桑原美峰氏　池田美尚氏　魚崎美福氏　松岡茂里雄氏　白井清華氏　近江清華氏　塚口清雀氏　富岡生昇氏　沼井盛鶴氏　時田靜史氏　關口靜香氏　仁木翠松氏

（地方之部）

米國平野一昇氏　同武榮玉氏　同杉山陶岳氏　同兼廣廣玉氏　同西本西紫氏　大阪氏家鶴峰氏　神戸岡田源氏　大垣吉岡十八公氏　船橋川奈部銀司氏

下關保良鈴鳳氏　横濱和田和朝氏　同霜島錦司氏　同鈴木香雀氏　同田中呑笑氏　松戸木下松玉氏　平塚市國森鳴門氏　八幡古賀大彌氏　安東市岩崎山彥氏

當座帳

△銀座義榮會　同會の稽古所を京橋區小田原町一丁目木村屋別館二階に變更。

△鈴木兒雀氏　中野區上の原町廿八番地へ轉居。電話中野三三一〇番。

▲竹本津の子太夫　十三年五月より出征中の竹本津の子太夫は今回芽出度凱旋。

▲竹本東廣　京城に出張中の同師は病氣の爲め歸阪、大阪病院へ入院。

▲米谷米翁　城東區大島町一丁目卅一番地へ轉居。

▲竹本重吉　九月類燒した同師は同市田中呑笑氏方に假偶。

寄贈新刊

▲淨曲新報▲みどり▲可樂▲京城のラヂオ▲土▲大日本淨瑠璃界▲風▲淨瑠璃時報▲淨瑠璃月報▲藝▲露▲淨曲研究▲碧雲▲梨園▲寶塚月報▲文樂▲淨瑠璃雜誌▲サンジヤウ▲大橋圖書館第卅一回年報

訃報

小坂三よし氏　九月十八日午後七時永眠。氏は醫師にて素義の美聲家、得意の語り物は湊町、新口村、山名屋等であつた。謹んで哀悼の意を表す。　太棹社

編輯後記

★秋の好季となり東京市内は申す迄もなく各地は大會に次ぐ大會、愈々隆盛のほど慶賀の至りです、何卒新體制に順應して國民精神の發揚に努めていたゞき度希ふ次第であります。

★先月は原稿を印刷にまはしますと、校正を某友と印刷所に依賴をして佐渡へ旅立ちました處、出來あがつた雜誌は古曲發表會の廣告で豐澤團七師が七團になつてゐたり、波木井の里が波森の里に變つたり、猿藏氏が同地へ赴いたの同地が內地となつたり、大分誤植があつて申譯がありませんでした。これは斯く申す私にもあります事で、兎角校正は錯覺誤植があり勝ちでむつかしいものであります。

★本月も十五日夜出立、越後の鄉里へ二週間程の豫定で旅立ちますが、校正は出立前に終り發行も出立前に出來る事と思ひます。不在の爲め大會に一寸でもお伺ひの出來ないことは殘念ですが何卒御諒承を願上ます。（十月十二日河芳士記）

第百十九號　（毎月一回十日發行）

定價
一部　金三十錢　郵稅三錢
六月分　金一圓八十錢　郵稅共
一年分　金三圓　郵稅共

廣告料
普通　一頁　金貳拾圓
特別　一頁　金參拾圓

▼記念寫眞掲載料は一頁金拾五圓申受ます
▼誌代は總て前金御拂込の事
▼なる可く振替に御送金の事
▼郵券代用は一割增但三錢切手の事

昭和十五年十月八日印刷納本
昭和十五年十月十日發行
東京市小石川區音羽二丁目一四
編輯兼發行人　富取壽鹿
東京市牛込區早稻田町五八
印刷人　栗原榮松
東京市牛込區早稻田町五八
印刷所　栗原印刷所　電話牛込一四五一番
東京市小石川區音羽二丁目一四
發行所　太棹社
振替東京三一七八五番